

図書館情報資源概論

分析レポート

所属 社会学部メディア社会学科1年

学籍番号

名前

分析レポート

第一章 はじめに

今回の分析レポートでは、「大田洋子」をテーマに広島市立図書館と立教大学図書館を、蔵書数、分類、資料の種類、などの観点から分析・比較し、対象館2館のテーマに関するコレクション形成の傾向・特徴を明らかにする。また、各図書館の傾向・特徴とコレクション形成方針を照らし合わせ、各館が適切にコレクションを形成しているかそれぞれ評価する。広島市立図書館では、広島市立図書館資料収集選択基準で「広島資料のうち、広島市の出身者、在住者及びゆかりのある人物の文学資料等を、広島文学資料として積極的かつ網羅的に収集する。」と定め、その対象人物として「大田洋子」を含んでいる。この点から、広島市立図書館が大田洋子にゆかりの無い立教大学図書館と比較して、図書の種類や蔵書数においてより多種多様な資料を収集していると考えられる。その際、広島市立図書館の蔵書を、出版書誌データベースや NDL Online と比較することで、広島市立図書館が資料収集選択基準に沿って、どのように資料を詳細に網羅的に収集しているのかを検証し、資料収集選択基準と照らし合わせることができると考える。以下では、広島市立図書館が立教大学図書館と比較しより多種多様な資料を収集しているという仮説を、どのように網羅的に資料を収集しているかを他のデータベースと比較しつつ検証し、各図書館が各々のコレクション形成方針に従っているのかを確認していく。

第二章 蔵書の分類の比較

はじめに、広島市立図書館と立教図書館の蔵書を分類から比較する。広島市立図書館では大田洋子をテーマとした資料を全 365 点収集している。対象資料は区分別に、一般書 32 点、児童書 1 点、郷土 328 点、原爆 26 点に分かれている。分類別に見ると、総記 1 点、歴史 2 点、社会科学（社会）1 点、文学 39 点と分かれる。一方、立教大学図書館では大田洋子に関する図書全 26 点が所蔵され、分類では総記（図書館・情報学）1 点、社会科学（法律）1 点、文学 12 点、言語（アメリカの諸言語）12 点に分かれ、言語に分類される資料は保存書庫や自動書庫で保管されている。蔵書数では広島市立図書館が圧倒的に多いが、分類は社会科学や言語という点で内容に少しずつ差が出ている。2館で最も多く所蔵される分類である文学は、どちらも作品集が最も多く所蔵されているが、作品集は定期的に何巻も出ているため、多くなっていると考えられる。

さらに各館の分類を細かく分析していく。立教大学図書館は、大田洋子が著作に関わる作品を主に収集し、全 26 点のうち 24 点が大田洋子による作品、残り 2 点が大田洋子の評伝である。一方広島市立図書館では、作家自身の作品や評伝に加え、大田洋子に関するテーマが「原子爆弾」「女性」「文学碑」「アメリカ文学」と分類され、さらに葉書に至るまであら

ゆる種類の大田洋子に関する資料が収集されている。NDCの区分表では、立教大学図書館は日本文学の中でさらに作品集や小説など3つの分類に区分され、広島市立図書館は5つに分類されている。これは資料収集方針の「その人物の文学的資料（詩、小説、物語、評論随筆、紀行、手記、ルポルタージュ、エッセイ集）とその院物の電氣的資料や創作活動関連資料等も含めて網羅的に収集する。」に沿っていると考える。

第三章 蔵書の比較

次に2館で所蔵される図書の蔵書の分類について分析する。広島市立図書館で所蔵されていて立教大学図書館で所蔵されていない資料は、303点ある。しかし、実際は広島市立図書館では初版や第1刷に注目して収集している点や、同じ本でも出版年や蔵書リストの表記が異なる資料などを考慮する必要があると考える。それらの点をふまえると、同じ資料であるが表記の違う資料が11点あると考えられ、広島市立図書館のみに所蔵されている資料は292点、2館両方にある資料は22点となる。一方で、立教大学図書館にしか所蔵されていない資料は4点となる。この4点は具体的に示すと『「子どもの引渡し」の法律と事務』、『現代日本小説；第2巻』、『ヒロシマ・ナガサキ』、『沖縄の図書館』であり、そのうち2点は広島市立図書館とは異なる分類内容の総記と社会科学の分類の書籍である。立教大学図書館の資料は全26点のうち17点が出版書誌データかNDLオンラインでも検索される資料であるが、先述した資料のうち前者3点は、他のデータベースでも該当していない資料であるため、大田洋子について関連しているかは確信できないと考える。その点で、広島市立図書館がこれら4点の資料を蔵書していないことは、2館の蔵書数の差から考えると大きいと考えるが、必ずしも網羅的な収集でないとは断定することは難しい。しかし、立教大学図書館の蔵書が他のデータベースで該当する件数が多いという点で、立教大学図書館の蔵書構築方針にある「各分野の基本的な資料を収集する」という点が評価できると考える。

第四章 広島市立図書館の所蔵数についての考察

ここまで、各館の蔵書について分類や蔵書数の比較を行ってきた。その際に、広島市立図書館の蔵書が立教大学図書館と比較としてその資料内容、所蔵数とも網羅的であることが読み取れる。では、実際どうしてこのように差がでるのかを、NDL Onlineと比較しながら考えていく。まず広島市立図書館において、大田洋子に関する資料形態は、書誌が図書であるものと内容が図書であるものにより365点で構成されている。NDL Onlineでは図書が115点で、雑誌190点、雑誌記事75点、テーマに関する資料全体で246点であり、全ての資料を合わせても図書の形態のみの資料を収集する広島市立図書館の方がより所蔵数が多く、この点からも蔵書数は比較的多いと判断することができる。その原因としてはまず、広島市立図書館が「被爆による人的・物理的被害を記述したあらゆる資料並びに関連する多様な資料及び平和に関する資料（広島市立図書館の資料収集方針 | (4) 被爆文献資料（原爆・平和関係資料））」を、できる限り3部以上収集する事を定めているからではないかと推測

する。大田洋子は広島で被爆し、その後は作風を変えて被爆の惨状を描いた作家であり（コトバンク「大田洋子」より）、広島市立図書館において原爆という分類で 26 点該当している。

また、広島市立図書館は広島文学史料に関して、「同じ作品でも、出版者・出版年等が異なる初版本（広島市立図書館の資料収集方針 | イ 収集の資料）」を収集し初版本や第 1 版第 1 刷を重点的に収集している。初版を収集する理由としては、「初版本は著作発表当時の著者の思想を知るものとして重要である（コトバンクより「初版」）」と考えられる。大田洋子による著作である『屍の街』を図書形態で、NDL Online と広島市立図書館で比較すると、NDL Online では 15 点、広島市立図書館では 22 点、そのうち初版は NDL Online は 0 点、広島市立図書館は 10 点あがる。出版者は両者とも 10 件があがり、そのうち 3 件が違う出版元である。出版年数は、NDL Online が 1948 年～2020 年、広島市立図書館が 1946 年～2020 年と、後者の方が 2 年ほどより昔の資料を収集している。この点からみると、広島市立図書館が初版を多く、年代を幅広く収集しているために蔵書が多いと考えられる。だが、大田洋子に関するその他の作品を例にとってみると異なることがいえる。大田洋子による作品『桜の国』、尾形明子による作品『戦後の出発と女性文学』、江刺昭子による作品『草篋』について比較すると、各蔵書数と出版者数に大差はないが、広島市立図書館はどの作品でも 1 点以上は初版を収集し、出版年数も 3 点で平均 3.5 年昔のものから収集している。出版者と出版年に関しては、大田洋子をテーマに該当する全資料に対しても同じことが言え、出版年は幅広く、出版者も倍程違うことが分かる。以上から、同じ作品またはキーワードで検索して、そのうち初版本が何点か含まれているが蔵書数に大差は出ていないため、初版本の収集が両者の蔵書数の大差にさほど影響を与えとは考え難いことが分かった。その一方、広島市立図書館の傾向としてはより初版本を収集し、幅広い出版・年代の資料を収集して網羅的に蔵書していることが伺え、資料収集方針に沿っていると考えられる。

そして最後に <http://library.rikkyo.ac.jp/cdpolicy/>、出版者の数や出版年数の他に、広島市立図書館の蔵書が網羅的であるもう一つの要因として、蔵書の種類があると考えられる。広島市立図書館は、大田洋子による葉書や直筆色紙、書簡などが収集している。そうした多様な資料の収集がより網羅的な蔵書につながっていると考える。

第五章 まとめ

ここまで、「大田洋子」をテーマに各図書館またはデータベースを比較してきた。立教大学図書館は、大田洋子が作家として携わった作品について主に収集している。他のデータベースにも出てくる作品を多く収集している点は、蔵書構築方針にある「各分野の基本的な資料を収集」していると考え評価する。しかし他の点に関しては、評価をする判断基準が少ない。一方で、広島市立図書館は図書の内容、資料の種類、蔵書数からより立教大学図書館やデータベースより網羅的に収集をしていると分かった。この点において、広島市立図書館資料収集選択基準で「広島資料のうち、広島市の出身者、在住者及びゆかりのある人物の文学

資料等を、広島文学資料として積極的かつ網羅的に収集する」に沿っていると考える。また、特に初版本をより多く集め、出版者や出版年数において幅広く収集していることは、広島市立図書館の資料収集方針の「同じ作品でも、出版者・出版年等が異なる初版本（広島市立図書館の資料収集方針 | イ 収集の資料）」に沿っていると考える。以上広島市立図書館に関しては、資料収集方針に従って資料を収集していたと評価する。その際に、留意しておくべき点は、その網羅的な収集の意義だと考える。コトバンクによれば、当時被爆後に作風を一変させ、被爆について作品をかいた著者の作品『屍の街』は、占領軍検閲下で、1948年になってから削除判の発表が可能になったという。広島市立図書館がこうして戦時中や戦後の資料を、初版という形で保存していることは大きな価値があると思う。

【参考・引用文献】

コトバンク、<https://kotobank.jp/>(最終アクセス 2020年1月12日)

立教大学図書館、「立教大学図書館蔵書構築方針」

<http://library.rikkyo.ac.jp/cdpolicy/>

(最終アクセス 2020年1月12日)

広島市立図書館、「広島市立図書館資料収集方針」、

<https://www.library.city.hiroshima.jp/public/policy.html>

(最終アクセス 2020年1月12日)